

MLC340 フランス文学

3年 3,4クォーター

担当教員 松田 和之

授業形態 講義

アクティブ・ラーニング 要素を含む

単位数 2

曜日・時限 水曜日・2時限

授業概要

授業の前半では、ベル・エポックと両大戦間の時代に焦点を当て、長らく西欧社会を支配してきた「絶対」という観念が急速に力を失い、それに代わって「相対」的な物の見方が確実に浸透してゆく時代のフランス文学について、アポリネールやコクトーに顕著に見られる諸芸術のボーダレス化というこの時代を特徴づける現象にも着目しながら、複眼的な視座から考察を深めてみたい。その際には、文学作品のみならず、同時代の美術作品や音楽作品をも考察の対象に含め、20世紀の初頭に芸術のさまざまな分野で繰り広げられた革新運動に共通して見られる特徴について講じる。

授業の後半では、フランスがナチス・ドイツの占領下に置かれた時代に生み出されたレジスタンス文学に着目し、いわゆる「文学と政治」論争をも視野に入れて、その特異な性格について検討を加える。占領下の文学者や芸術家、知識人たちが皆レジスタンスの姿勢を鮮明にしたわけではなく、その多くがレジスタンスと対独協力の狭間で自らの立場を模索したのだったが、この授業では、特にコクトーを苛んだ心理的葛藤に注目しながら、文学や芸術と政治（イデオロギー）との関係についてさらに考察を深めてみたい。

到達目標

- (1) 19世紀末から20世紀初頭のフランスにおいて、文学や芸術のさまざまな分野で顕著となる西欧的な価値観の“コペルニクス的転回”について、当時の詩や小説、絵画、音楽等の鑑賞を通じて考察する。
- (2) 文学作品や映画作品を通じてナチス占領下の時代を理解するとともに、いつの時代においても問題になってきた文学（芸術）と政治（イデオロギー）の関係について考察する。

期待される効果

- (1) 「絶対」から「相対」への価値観の転換は構造主義等の現代思想にも繋がるものであり、主客転倒的な考え方を理解することで、現代社会で必要とされる複眼的な物の見方を身につけることができる。
- (2) ナチス占領下の時代を生きたフランスの作家や知識人たちの行動を通じて、古今東西で議論が闘わされてきた文学と政治の然るべき関係について問題意識を涵養することができる。

先修科目

「フランス文学入門」（共通教育科目）

教科書・参考資料等

- ・特定の教科書を使用する予定はない。
- ・参考資料(参考図書)については、授業の中で随時紹介する。ここでは、授業の後半の内容に関連する書籍を2冊挙げるにとどめたい。
 - (a) 渡辺和行『ナチ占領下のフランス—沈黙、抵抗、協力—』、講談社、1994年。
 - (b) ジャン・コクトー『占領下日記Ⅰ～Ⅲ』、秋山和夫訳、筑摩書房、1993年。

授業の方法

授業は基本的に講義形式で進めるが、扱う内容によっては、受講生たちとの意見交換を交えて双方向型の授業形態を取るケースも想定される。

プリント資料を順次配布し、それらを参照しながら授業を進めてゆく。

授業時には、パワーポイントやビデオ・DVD、CD等のAVメディアを積極的に活用する。特に前半の授業では、美術作品を多く扱う性格上、パワーポイントを用いる機会が多くなる。また、前半、後半とも

に、やはり授業内容の性格上、映画鑑賞の時間を随時交えることになる。

成績評価

受講態度等を考慮した平常点及びレポート（あるいは筆記試験）やリアクション・ペーパー等の課題への取り組みに対する評点から、総合的に評価する。

成績

- 40% 平常点
- 30% リアクション・ペーパー（毎回、提出を求める）
- 30% レポート（あるいは筆記試験）

授業スケジュール

第1回：ガイダンス等

最初に授業概要や成績評価等に関する説明を行う。続いて「ヘレニズム」と「ヘブライズム」をキーワードに用い、この授業で扱う20世紀初頭の時代に至るまでのフランスの精神史・文化史を概説する。

第2回：「虐殺された詩人」アポリネールの生涯とその作品

20世紀の幕開けとともにパリで活動を開始したアポリネールの諸作品は、まさに時代精神を体現したものであった。授業では、それらの意義を講じるとともに、彼に多大な影響を与えたジャリの問題作『ユピュ王』の革新性・先進性についても考察する。

第3回：ピカソとキュビズム—「絶対」から「相対」へ—

「20世紀最大の画家」ピカソはアポリネールの無二の親友でもあった。授業では、彼が起こした絵画史の革命であるキュビズムについて、「絶対」から「相対」への価値観の転換がそこに如実に認められる点に着目し、その意義を論じる。

第4回：「奇蹟の年」1913年とロシア・バレエ団の衝撃

芸術のさまざまな分野で重要な作品が発表された1913年という年に注目し、プルーストの『失われた時を求めて』やヴィュー＝コロンビエ座、そしてロシア・バレエ団について、それらが小説、演劇、バレエの歴史において果たした役割を検証する。

第5回：ストラヴィンスキーとサティの音楽—『春の祭典』と「家具の音楽」—

ワグナーの影響下にあった当時のフランス音楽にそれぞれ独自の作風で以て新風を吹き込んだ二人の作曲家の音楽を鑑賞しながら、西欧クラシック音楽の伝統的な語法との比較を通じて彼らの音楽の革新性を明らかにする。

第6回：マルセル・デュシャンとレディメイドの手法

「20世紀最大の画家」はピカソではなくデュシャンであると見る識者も少なくないが、コンセプトの急進性が際立つ彼の作品の中でも特に「芸術とは何か」という根源的な問いを観る者に突きつけるレディメイド作品に注目し、その美術史的・文化史的な意義について考察する。

第7回：ダダイズムとシュルレアリスム—『幕間』と『アンダルシアの犬』—

20世紀を席卷した二つの芸術運動について、それぞれを映画の分野において代表する二作品の比較を通じて両者の共通点と相違点を明らかにし、映画以外の分野における運動の展開をも概観しながら、その歴史的な意義について考察する。

第8回：表現内容から表現形式へ—ウリポの試みと不条理演劇—

美術におけるデュシャンや音楽におけるサティの試みとも呼応するかのよう、文学の分野においても、表現内容から表現形式へと作家たちの関心が移り変わってゆくが、授業では、それが最も過激な形で示されたウリポと不条理演劇について講じる。

第9回：「文学と政治」論争と第二次世界大戦

文学（芸術）は時局（時の政治体制や社会的イデオロギー）とどのように関わるべきなのか。ナチス占領下の時代を生き抜いたフランスの作家や芸術家たちは、否応なくこの問題と向き合うことになった。授業では、第二次世界大戦に関する理解を確認した上で、古今東西で繰り返されてきた「文学と政治」論争について講じる。

第10回：ナチス占領下のフランス—「沈黙」、「抵抗」、「協力」—

占領下の時代の文学者や芸術家、知識人たちは、レジスタンス（対独抵抗）とコラボラシオン（対独協力）の狭間で自らの立場を模索したのだった。授業では、彼らの足跡を検証するとともに、人類の歴史に拭い去りがたい汚点を残したホロコーストについても講じる。

第11回：ヴェルコールの『海の沈黙』—レジスタンス文学の系譜—

占領下の時代が生み出した特異な文学であるレジスタンス文学について、エリュアールやアラゴンの詩、そしてヴェルコールの小説を取り上げて概説する。特にレジスタンス文学の白眉と称される『海の沈黙』については、作品の生成過程にも注目しながら、詳しい解説を加える。

第12回：メルヴィルの映画『海の沈黙』—小説と映画—

二つの『海の沈黙』（ヴェルコールの小説とそれをメルヴィルが映画化した作品）を比較検討し、レジスタンス文学の特異性を明らかにするとともに、文学作品の映画化に伴う諸問題についても考察する。

第13回：二つの「美女と野獣」—ヴェルコールとコクトー—

ヴェルコールが『海の沈黙』の中に盛り込んだ「美女と野獣」のエピソードと占領下の時代が終わった直後にコクトーが制作した映画『美女と野獣』に対してそれぞれ考察を加えることで、「文学と政治」に関する二人の作家の対照的な考え方を浮き彫りにする。

第14回：占領下の時代のコクトー

占領下の時代のコクトーは、対独協力側から敵視されたのみならず、レジスタンス側からも手厳しい指弾を浴びた。授業では、文学と政治を峻別する彼の作家・芸術家としての厳格な倫理観がその要因となったことを論じる。

第15回：「現実性」の文学と「非現実性」の文学

占領下の時代のコクトーを深刻なジレンマに陥れた文学における「現実性」と「非現実性」の問題について、第9回で取り上げた「文学と政治」論争を絡めながら、考察を深める。

事前・事後学習

- (1) 事前学習（予習）：各回の内容に関するプリント資料は、その前の回の授業時に配布するよう心がける。受講生は、毎回、授業の前にその回の資料プリントにひととおり目を通し、知らない言葉や未見の情報については出来る範囲で下調べをした上で、授業に臨んで欲しい。
- (2) 事後学習（復習）：授業時にとったノートを基に、教員の口頭説明やパワーポイント等から得られた知識を自分の言葉でまとめ直す作業は、知識の定着を促すのみならず、思考力を養う上でも有効であり、受講生にとって欠かせない作業となる。